4　それぞれの所感（大谷の場合）

⑴　冒険前夜

帰宅後，部屋の隅に置かれた大きなバッグを見た。それはここ数か月間，ずっとその場所にあるのだが，今日はその存在感が違った。9月頃から無人島に行くために準備していたバッグだ。出発予定日の前日に波が荒れているので島に行くことができない，と聞くこと数回。さらに，軽石の漂着問題がニュース等で大きく報じられ，今年はもう行けないのかもしれないと思っていた。しかし，祈りが届いたのか，11月19日の金曜日，大冨先生から「行ける」との言葉があった。私は「行けるんだ…！」とうれしさをかみしめた。無人島への準備だが，必要なものはすでに準備をしていたので，あとは水と服をバッグに入れるだけで済んだ。「楽しみだな」とにやにやしながら自分のやりたいとことを考えていると，高校時代からの友人から電話があった。飲みに行こうという誘いであった。「明日は無人島に行くから遅くまでは飲めないよ。」と一言いうと，「俺も明日仕事だから遅くはならないよ。」と返事があった。それなら安心だと家を出で，そして帰ってきたのは，午前2時すぎ。実は0時以降は友人にばれないように，水割りの水割りばかり飲んでいた。普通であれば，「ぜんぜん寝てないけど，明日は体力持つかな」と不安になるが，無人島だけは別腹だ。毎回興奮して寝ないままで行くが，特に問題なく元気に動くことができている。

⑵　集合，そしてフルサト浜へ

11 月 20 日（土），学校の地下駐車場に集合。いつもの場所である。今回は，前回のメンバー大冨先生，大谷に加え，新たなメンバーとして，前村先生，向段先生が参加した。4人でどんな無人島生活を作り上げていくのか楽しみだ。各自の荷物を向段先生の車に積み込み（私の車の予定だったが入りきらなかった），校門前に集合した。出発前の記念撮影である。申し訳なかったが，通りがかりの本校の女子生徒に撮影をお願いした。生徒もこのような職員の姿に驚いたであろう。初めて撮影するおっさん4人の写真撮影。この経験を通して，少しでも中年男性職員に親しみを持ってくれればこれ幸いである。

車で1時間ほど移動し，古仁屋に到着した。まず向かったのは，Aコープ瀬戸内店。今晩の食材やお酒等を購入する。今回は，大冨先生がホットサンドを作るということで，食パンやチーズも購入した。私はホットサンドが大好物であったので，大変ありがたいことであった。その後，出港時刻の 30 分ほど前に港に到着した。余裕を持って荷降ろしをして船長を待つ。いつもお世話になる「みなみ丸」の船体に，大きく書かれている「泰」の字。私の名前，「泰行」の「泰」と同じである。とても親近感がわく。まだ時間に余裕があるということで，港周りの散策をすることにした。まず，荷降ろしをした岸壁の近くで『餌付け中，釣らないでください』と書かれた看板を発見。海を覗くと，魚が大量に泳いでいた。まるで生け簀のようであった。型のいいチヌが多く，釣りたいなと思ったが，そうすれば，警戒してしまいもうこのような光景を見ることができなくなるのだろうなと思った。

次に，せとうち海の駅付近を散策。すると海亀を見つける。「タイマイだ！」と，大冨先生が大興奮している。たしかに甲羅を見ると，先がとがったような形になっている。タイマイを見ることができたことに感謝をすると共に，大冨先生の博学さに脱帽した。散策をして時間をつぶし，再び港に戻ると，程なくして船長が到着した。船に荷を積み込んで，出港の準備。この時知ったのが，船長の息子さんが，今年のドラフト会議で指名され，神村学園から東北楽天ゴールデンイーグルスに入団したということ。ドラフトの際に，奄美出身で「泰」という名字の選手がいるということは知っていたのだが，まさかこんなところでつながるとは驚きであった。

荷物を積み終わり，出航した。波は穏やかであった。船が次第に加速して水しぶきを上げる。風としぶきを肌で感じながら，ふと船首をみる。前回の研修までは，異動して今はもういないある一人の男が，「俺は海賊王になる」といわんばかりに，そこに陣取っていた。大自然の風景は変わらないが，人は変わっていく。まさに「国破れて山河あり」である。そうこうしているうちに目的のフルサト浜が見えてきた。テントを張りやすそうな広い浜だ。しかし，浜の端にある岩場に行くまでには少し歩かなくてならない。無人島に行くと必ず岩場で貝を探す私にとっては，少し広すぎる浜だった。

⑶　到着，そして楽しい時間

船を浜に着けてもらい，荷物を降ろす。とりあえず，荷物を波で濡れない場所に次々と運んでいく。すべて降ろし終わると船はすぐに去って行った。「ハブがいるよ」という言葉を残して…。絶対にテントの入口は開けずに寝ようと，心に誓った。気持ちを切り替え，まずはテントを張る場所を決めるのも兼ねて浜の散策だ。歩いていると，砂浜に穴があいているのを大量に発見した。カニの巣だ。どのようなカニがいるのか，掘ったら出てくるのかと考えていると，向段先生がカニの巣穴に貴重なペットボトルの水を垂らしていた。カニが出てくるのかと期待していると，大冨先生が「そうすると，何か起きるんですか」と質問をした。「いや，なんとなくやってみただけ。」と向段先生が返事をした。吉本新喜劇であれば，うへぇー，と皆転がっているところだ。まさか，普段クールで真面目な向段先生がこのようなことをするとは。意外すぎて，だから大冨先生も，何かが起こると思ったに違いない。その後，西側の岩場に向かった。濡れながらも生き物がいないか探し回ったが，ほとんど見つけることはできなかった。東側にも岩場はあるので，そちらに期待して，来た道を戻った。

西の浜は，砂利が多かったのだが，東の浜は砂がさらさらであった。そこには小笠原近海産の軽石も流れ着いていた。テレビ画面でなく，実際に目にすると感慨深いものがあった。さらに進むと，日陰があり，ロープを張るための木もあり，ベンチになりそうな木もある（木は横に倒れていたのだが，砂地に突き刺さるようにして，ちょうど良い高さに浮いていた）。テント設営地が決まった。さっそく荷物を運び，テントの設営を開始した。砂浜にそれぞれ，青，緑，黄色のカラフルなテントが立ち並ぶ。設営が終わると，食事をとる場所を作るため，浜に落ちていた板を使って整地をした。さあ楽しい時間が始まるぞ。私は，自然のベンチ（倒木）に座り，一服してから，海へと向かった。さすがは奄美。晩秋でも余裕で泳ぐことができる。海に入ると珊瑚と多くの魚たちが迎えてくれた。ひとしきり，海の美しさを楽しんだ後は，狩りである。一度海から出ると，持参したモリを持って再び，海へ入る。昼間の魚は素早い。しかも魚のいる場所が浅かったので，潜ろうとした時点で逃げられる。岩の下にいる魚を狙って潜ると魚はいるのだが，そこは岩の下ではなく，珊瑚の下。モリをついて傷を付けたら大変だ。それでも諦めきれずに何度かトライしたが，おじさんの体力はそんなに続くものではない。「東の岩場に貝を探しに行こう。魚は前村先生が釣ってくれるだろうし。」ときれいさっぱり諦め，海から上がった。

東の岩場は小さな巻き貝とハゼが多くいたが，食べられそうなものは少なかった。同じ海でも島によって生き物の種類が違う。無人島で岩場を探検するたびに，思うことである。少しの貝を網に入れ，ベースキャンプへと戻り，ベンチに座り一服した。その後，かまど予定地に大きな板を置き，その上にそれぞれのコンロを置き，昼食の準備を始めた。そして，無人島に来て最初の乾杯。無人島での冷たい飲み物は，貴重である。

その後，ロープに灯りとなるものを吊るしたり，全員で石を集めてかまどを作ったり，集めた木に火を付けたり，夜の準備を始めた。ひとしきり準備が終わってまた一服。海の方を見ると，前村先生が釣りをしていた。釣れたらいいなとボーと見ていると元気な魚が浜に上がってくる。その中には，オジサ

ン（という名前の魚）もいた。釣れた魚は前村先生が直々にさばいていた。おじさんがオジサンをさばく。ちょっと面白い。

そうこうしていると，夕日が西の空に沈む。さあ夕食の時間だ。本日２度目の乾杯を行い，肉を焼き始める。Aコープの肉はさすがにおいしい。私は途中から，飲み物をウイスキーに変え，肉を楽しんだ。途中，貝や魚も茹でていただいた（前村先生が出汁を用意していた）。ひとしきり食事を済ますと，前村先生は夜釣りを始めた。光る浮きが暗い海を漂っている。竿を２本砂浜に立て，獲物がかかるのを待つ。私もたばこを吹かしながら，浮きの動きを見ていた。「あ，動いた」と思った瞬間，前村先生がアワセにいく。その夜は，アカヒメジなど何匹かの魚が釣れた。夜は魚釣りだけではなく，向段先生のギターの生演奏も行われた。リクエストを聞き，なんでも演奏をしてくれた。「楽器を演奏できるってうらやましいな」といつも思うことである。しかも言われた曲を直ぐに演奏できるとは，かっこがよすぎる。話しあり，釣りあり，歌あり，大変楽しい時間だった。気がつくと小瓶に入れてきたウイスキーが空だ。そしてもう一つ気付いたことがあった。マスクを外してこれだけの時間自分以外の人といたのは久しぶりであった。まだまだ楽しい時間を過ごしたかったが，明日もあるので，各自テントに戻り，眠りについた。

⑷　名残惜しい時間

「ヒュン」という音で起きる。何の音かと思い，テントの入口のチャックを開け，外をのぞくと，前村先生が釣りをしていた。昼・夜・朝と釣りを満喫している。自分も起きなくてはと，ベンチに座り一服。程なくして全員ベースキャンプに集合した（前村先生はお魚と格闘中）。朝食は大冨先生特製のホットサンド。コーヒーもいただき，無人島の朝食とは思えぬおしゃれな朝食となった。その間も，前村先生は黙々と海と闘っていた。その釣果は，35センチ超のオビブダイ。ヒトスジモチノウオ２尾。オビブダイは口の先にかろうじて針が引っかかっている状態であった。前村先生の気持ちの勝利だ。今回，オビブダイだけは，私が三枚に下ろすこととなった。大丈夫だろうと思っていたが，実際にやってみるとなかなか大変であった。まず，ぬるぬるしていて持ちにくい。身に弾力があって包丁の先が刺さりにくい。一番大変だったのは，骨に沿って切り始めた時だった。「あれ，包丁が進んでいかない。」と思って切れている部分をつまみ上げて中を確認すると，おなかのあたりに弾力のある白い膜のようなものがあった。初めての経験だった。その結果，骨にかなり身が残る状態の三枚おろしとなってしまった。釣った魚はすべて茹でて（出汁入り）でいただいた。オビブダイはカラフルな魚であったので，どのような味がするのか楽しみだった。食べると鱈のような食感と味だった（鱈より身は緩かったが）。朝食の後は，皆サップなどをして海を楽しんでいた。大冨先生は，歩いては行けない隣の浜からビールケースをサップに乗せて持ってきた。ビールケースは前村先生の椅子となった。海辺でビールケースに座りじっと釣りをしているその姿は，遠くから見ると，まるで水墨画のようであった。

そうしているうちに，お迎えの時間が近づいてきた。撤収作業に入る。そこで，三つの事件が起きる。一つ目は「ウキ破壊事件」。前村先生が釣り道具をかたづけていると，高価な電気ウキを一つ，自分の足で踏んで壊してしまう。実はそのウキは，昨夜の釣りの最中，海に流されてしまってもう回収できないと諦めてきたところを，そのうち波に揺られながら自力(?) で浜まで戻ってきたウキであった。その時は，無くなったと思ったウキが戻ってきて良かった，奇跡だと喜んでいたのだが，まさか主人の元に戻ってきたところを破壊されるなど，本当に波瀾万丈の人生を送ったウキとなった。二つ目は「テント撤収不可能事件」。前村先生のテントのたたみ方を，向段先生と大冨先生が教えていたのだが，前村先生がやっても一向にたためず，それならと向段先生が何回か実演するたびに向段先生もたためなくなってし

まい，なぜか全員が正解が分からなくなり，テントがたためなくなるという摩訶不思議な現象となった。三つ目は，「大谷老化事件」。帰りの船に乗ろうとしたときに，私が船のステップを踏み外して滑り，砂浜に思いっきり尻餅をついて転んだというだけのことだが，「自分も年取ったな」と少し切なかった（みんなは大爆笑していた）。

⑸　帰港，そして解散

なんだかんだあって，船に荷物をすべて積み込み，無人島に別れを告げる。少し寂しい気持ちで船の後方に行くと，大きなロウニンアジが。船長が迎えに来る際，ルアーを流していたら釣れたらしい。みな盛り上がったが，その大きさに前村先生は少し複雑な気持ちであったろうと思う（そのロウニンアジは，船長はいらなかったらしく，海の上でちょうどすれ違った他の船の人にあげていた）。港に着くと，荷物を車に載せ奄美高校を目指すのだが，みんなこの冒険終わらせたくないという思いからか，無駄に古仁屋の川で大ウナギを探したり，高知山展望台で大島海峡を眺めたり，住用でモダマを見学したりと様々な場所を巡りながら帰った。しかし，終わりはやってくる。今しがた降り始めた土砂降りの中，名瀬に入り，出発地の奄美高校地下駐車場に着く。終わったという寂しさもあったが，「次は？」という気持ちが直ぐに湧いた。体は老化しているが，気持ちはまだまだ大丈夫なようだ。単に精神年齢が低いだけかもしれないが，これからも挑戦する心，冒険する心はなくさずに行こうと思う。